

# 資本市場の開放が産業構造類似性に与える影響: OECD パネルデータに基づく分析

一橋大学大学院 吉見太洋

資本市場の開放は産業構造類似性に対して正・負両方の影響を与えられとされる。二国間における資本市場開放の進展は比較優位産業への国際的な資本流入を促す事を通じて産業構造類似性を低下させる（負の影響）。反対に二国間で資本市場の自由化が進めば外部資金を必要とする産業への特化が両国で進み、結果として産業構造類似性は高まる（正の影響）と考えられる。本論では 1980 年代以降進展した先進国間における資本市場開放がもたらしたのは正・負どちらの影響であったかという点について、1983 年から 2003 年までの OECD 加盟国年次パネルデータを用いて分析する。本論の分析によればサンプル期間内における資本市場開放の進展はこれらの国々の間で産業構造類似性を低下させる影響（負の影響）を与えてきた。

本論の特徴はパネルデータを用いている点にある。パネルデータを用いる事の利点は二国間で資本市場開放が進んでいる際に実現する産業構造類似性は高いのか低いのかについて非常に一般的な結論を得られる事である。これによって資本市場開放の進展の結果として高い産業構造類似性が実現したのか、低い類似性が実現したのかを直接的に分析する事が出来る。この意味で本論は資本市場開放と産業構造類似性の間の時間的な影響関係を分析するものであり、横断面データに基づくほとんどの先行研究との違いもこの点にある。

分析結果の頑健性を確認するために本論では二通りの方法をとる。第一の方法はサンプル期間の変更である。まずサンプル期間全体を複数の分割期間に分け、次にそれぞれの分割期間内で全ての変数の平均をとる。こうして得られた分割期間ベースのパネルデータで改めて分析を行う。これによって特に産業構造類似性の変化について年次よりも長い視野で見る事が出来る。第二の方法として地域ごとに分析を行う。本論の分析によれば、これらどちらの方法をとっても主要な分析結果は頑健なものであった。また本論の分析結果の頑健性は、固定効果モデルと変量効果モデルのどちらに基づく推定か、時間ダミー・時間トレンドを採用するか、その他の資本市場開放以外の変数を含むか否か関わらず維持された。従って 1980 年代以降の先進国間における資本市場開放の進展は、これらの国々の間で産業構造類似性を低下させてきたとの結論が頑健に支持される。